

学科科目の履修を目指した読解授業の実践

—総合政策学部「日本語Ⅲ（読解）」—

山口和代・山本菜穂子

要 旨

総合政策学部では、多様化し複雑化する現代社会の諸問題を多角的な視点から認識・分析し、政策に繋がる専門性に特化した知識とスキルの習得を目標としている。

本学部は主にアジアの国と地域から入学定員の1割に相当する留学生を受け入れている。留学生については、入学前に日本語を未履修の学生であっても、1年半で専門科目の履修ができるようにデザインされた日本語プログラムを提供している。日本語プログラムは、共通教育科目である日本語科目として位置づけられ、日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つのレベルに分かれ、日本語Ⅰでは「文法」・「読解作文」・「運用」、日本語Ⅱ、日本語Ⅲでは、それぞれ「読解」・「表現技術A」（口頭表現）・「表現技術B」（文章表現）・「総合」といった科目が配置され、アカデミック・ジャパニーズの養成を目指している。

本稿では、「日本語Ⅲ（読解）」クラスにおける学科科目の履修を目指した専門的な文献購読に役立つ知識、読解力の養成について実践報告する。

キーワード：学科科目、共通教育科目、読解授業、アカデミック・ジャパニーズ、専門分野、内容重視

1. はじめに

総合政策学部では、「ディプロマ・ポリシー」として「文明論と政策論を中心に修め、政策立案および運用において、幅広い視野と実力を備えた、リーダーシップを持つ人材を育成」することを目標とし、「多種多様な人々が、違いを認め合いながら共存、協働できるようになるため新たな文明論的価値を創造しつつ、積極的に問題解決に取り組む力」の養成が行われている。本学部では、「マルチカルチュラルなキャンパスを目指し、欧米先進国だけでなく、アジア各国・地域にも焦点を合わせ」、アジア諸国・地域からを中心とする留学生の受け入れに積極的に取り組んでいる。

留学生については、毎年入学定員の1割に相当する人数を学部1年生として受け入れ、日本語未履修であっても4年間で卒業させることを目標にデザインされた日本語プログラムが提供されている。日本語科目は日本語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの3つのレベルに分かれ、日本語Ⅰ

では「文法」・「読解作文」・「運用」、日本語Ⅱ、日本語Ⅲでは、それぞれ「読解」・「表現技術A（口頭表現）」・「表現技術B（文章表現）」・「総合」といった科目が配置され、アカデミック・ジャパニーズの養成を目指した授業が行われている。留学生は一部の共通教育科目や学科科目を日本人学生とともに履修しながら通常1年半で日本語科目の単位を取得する。共通教育科目である日本語科目の履修後に、一般的にはゼミといわれ、3年次から開始となる「プロジェクト研究」の履修要件を満たすべく、共通教育科目と学科科目¹⁾の単位取得を目指すことになる。

「日本語Ⅲ（読解）」の科目では、「国際政策、公共政策、環境政策など学科科目を履修する際に必要とされる文献、資料を読むための知識と実践的な技術を修得すること」を目標にしている。2017年度からは2名の教員が、文構造の学習に重きを置きつつ内容把握を行う授業（3コマ）と、内容重視で思考を深めることを目指す授業（1コマ）をそれぞれ実施し、様々な分野の文献に対応できるように授業を行っている。

2. 総合政策学部のカリキュラム

本学部では、「多様化し複雑化する現代社会の諸問題を多角的な視点から認識・分析し、解決に導く能力とスキルを養うことを目標とし」、「その実現のために学びの体系として、文明論をカリキュラムの根幹に配置し、人間と社会の価値に関わる根本的な諸関係」を学ぶことができるよう、共通教育科目、学科科目を配置している。大学のカリキュラム・ポリシーでは、共通教育科目は「人種、障がい、宗教、文化、性別など様々な違いを認識し、受容するための基礎となる教養、多様性を前提とした人間の尊厳、他者の尊厳を尊重する力、および多様な人々との共生・協働を可能にする基礎的専門知識、コミュニケーション能力、判断力」を養成することを目的としている。したがって、日本語科目のカリキュラムを考えるにあたり、ここに掲げられた能力を養成することを目標の1つとすることが重要になる。

また、本学部では、「文明論の学びを基礎に、社会科学の科目を、国際政策・公共政策・環境政策の3つの政策コースに対応する形で幅広く開講」している。学生はこれらの多様な科目の中から、段階的に政策の基礎知識を総合的に学び、その上で自らの興味と関心に応じて上記3コースより1つの政策コースを選択し、応用的かつ発展的知識を学ぶことになる。したがって、3つの政策コースで扱われるトピックに対応できる基礎知識と基本的な用語の修得も日本語科目の重要な到達目標である。

3. 日本語科目のカリキュラム

共通教育科目や学科科目では、レポート作成や発表のために多くの専門の文献の内容を的確に理解する知識、技術が要求される。そのため、「日本語Ⅲ読解」では基礎的な文法、語彙・表現の知識に加え、さらに専門的な文章を理解するために必要な背景知識を学ぶことに重きが置かれている。

基礎的な文法、語彙・表現としては日本語能力試験のN2からN1で扱われるものが対象となるが、社会科学の文献で使用される表現は文学で使用される表現ほど多様ではないことから、使用頻度の高い表現を選択し、確実に理解できることを目標にした。

また、文献の内容を的確に理解するために必要な基礎知識を修得するため、国際政策・公共政策・環境政策の3つの政策コースで扱われるトピックを参考に選定することにした。日本語科目では、初級の段階から扱うことが可能な日本文化一般に関するトピック（日常生活場面・社会生活場面）の中から、基礎的な社会知識に関するものを選定し、日本語Ⅰ「読解・作文」で扱い、日本語Ⅱでは科目により扱うことが可能なトピックとその数は異なるが、地球温暖化、少子高齢化、生殖医療、国連、NGO、ジェンダー、政治制度など各国に共通する社会問題と日本の社会問題を中心に選定している²⁾。したがって、学生たちのレディネスからも、日本語Ⅲのレベルではかなり高度なトピックを扱うことが可能である。

4. 日本語Ⅲ読解の授業の実践

「日本語Ⅲ（読解）」クラスでは、到達目標を以下のように定めている。

1. 専門科目を履修する際に必要とされる資料を読むための知識と実践的な技術が習得できる。
2. 専門的な文献に対応できるようになる。

学科科目では、幅広い視野と実践力を身につけるために国際関係、政治や経済、環境問題などの現代社会の諸問題や地域固有の歴史や文化に関する文献を理解する力が求められる。「留学生は現代日本社会の課題・問題に関する知識へのレディネスがほとんどなく、世界のそれに関してもレディネスが一様ではない」（山口2013：56）ため、「日本語Ⅲ（読解）」では、環境問題、社会問題、国際関係、科学技術、政治経済、文化といった分野から様々なテーマで書かれた読み物を取り上げ知識を深めている。以下は、今年度実際に扱われたテーマである。

1. 科学技術 「睡眠時間－短眠と長眠」
2. 環境問題 「循環型社会（持続可能社会へ）」
「地球温暖化」
3. 文化 「ことばと文化（言葉の役割）」
「言葉と価値観（カタカナ言葉）」
4. 文明 「文明はどのように伝わったか－1茶」
5. 経済 「あふれる食情報」
「衝動買いを誘導する」
6. 化学工業 「おいしい食感の理由」
7. 労働問題 「フリーター問題」
8. 異文化間心理 「異文化適応（カルチャーショック）」
9. 価値観の変化 「ジェンダー I（脳にみる男と女）」
「ジェンダー II（社会が作る男女差）」
「若者の自己評価」
10. 法と社会 「冤罪」

上級日本語学習者が学術論文の内容をどのように理解したかについて分析、考察を行った野田（2014：9）は、専門分野の学術論文を読むときの日本語学習者の問題点を以下のようにあげている。

- (a) 自分の知らない語句の意味を独自の方法で推測し、不適切な理解をすることがある。
- (b) 学術論文に出てくる複雑な文の構造がとらえられず、不適切な理解をすることがある。
- (c) 自分の既有知識に合うような内容が書かれていると思い、不適切な理解をすることがある。

そして、その問題点を解決する方法として、以下の方法を読解教育に取り入れる必要性を示している。

- (d) 文脈との関係を考えながら自分の知らない語句の意味を適切に推測する方法
- (e) 「読むための文法」を使って複雑な文の構造をとらえる方法
- (f) 自分の既有知識をうまく使って論文に書かれている内容を適切に推測する方法

4.1. 文構造の把握による内容理解を重視した授業

従来から行われている言語教育の方法では、まず学ぶべき言語形式が決められ、「文脈」

としての「内容」は、その理解や定着を図るために考えられるものでしかなかった。しかし本学部では、3つの政策コースで扱われるトピックに対応できる基礎知識と基本的な用語の修得も日本語科目の重要な到達目標であり、それを1年半で習得することが求められている。そのため、この授業では文構造の学習に重きを置きつつ、専門的な文章を理解するために必要な背景知識となるテーマを選び、内容把握を行う授業を目指した。

クラスでは、『大学・大学院留学生の日本語①読解編』、『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』、『生きた素材で学ぶ新・中級から上級への日本語』の読解教材から本学部の国際政策、公共政策、環境政策など学科科目を履修する際の文献購読の理解に必要なとされる知識、実践的な技術を修得するために有用なトピック－科学技術、環境問題、文明、経済、化学工業、労働問題、価値観の変化－から「睡眠時間－短眠と長眠」、「地球温暖化」、「文明はどのように伝わったか－1茶」、「衝動買いを誘導する」、「おいしい食感の理由」、「フリーター問題」、「若者の自己評価」を選んだ。日本語Ⅰ・Ⅱで学んだことをさらに発展、定着させるために新出の文型練習や文法・語彙練習を行い、文の構造を学びながら、内容理解の問題に取り組んだ。また、各自本文を要約し、ピア活動でお互いに理解した内容について話し合い確認した。学期末には、クラスで扱ったトピックのアンケート（無記名）を行った。その結果（表1）から学習者のトピックへの関心、内容の理解について以下、考察したい。

関心・興味が高かったトピックは、「文明はどのように伝わったか－1茶」であった。「今まで一度も考えたことがなかったテーマだったので、文明の伝播の仕方考える機会になった。」、「歴史を勉強するいいチャンスだと思う。」、「よび名で伝わったルートが違うことに気づくのがおもしろかった。」と、視野が広がり、新たなものの見方、本学部のディプロマ・ポリシーの一つ「文明論の観点から、地域固有の歴史、文化、宗教、社会、自然などを正しく理解し、多様な価値観を尊重、異なる価値相互の違いや問題性を的確に認識できる力」が身についた様子をうかがうことができる。

「睡眠時間－短眠と長眠」も、生活に密着した内容であり、「内容は面白くてみんなの生活に役立つテーマである。」、「内容はおもしろかった。前わからないことがわかった。」と、学習者の関心・興味が高かった。

「衝動買いを誘導する」では、経済学の視点から日常生活の購買意欲を喚起させる方法の具体例が書かれており、「みんなの生活に役に立つと思う。」、「共感したのでおもしろかった。」、「生活と密接な関係があるので、学んだ後、買い物する時よく思い出す。」とフィールドに出て実践的な分析につなげようとする動機づけとなっていた。「日常生活で気がつかなかったが、そんな学問があるとびっくりした。」、「衝動買いの定義が理解でき、衝動買いを誘導する商品と方法もわかった。」と新しい分野への理解も広がったように思われる。

「若者の自己評価」では、読解を通し日米の自己評価の違いを学び、さらに課題として

各国の若者の自己評価について調べ、多様な価値観をクラスで共有した。「他の国のことを知ることができるチャンスである。」「自分の自信について考えてみることができ、他国の若者の自信について共有して面白かった。」と、自己と他者、各国との比較を通し分析する力を身につけられたようである。

「おいしい食感の理由」は化学工業の分野であり、学生たちのレディネスのレベル差により「読むこと」に対しての難しさを感じる度合いの差が現れていた。「ちょっと難しくくて、わかりにくいと思う。」「語彙の意味は何となく分かるが、理解できなかった。」と内容理解が不十分だと感じる学習者がいる一方、「科学的分析をして、普段知らないことが勉強できた。」「科学的な文だったので、ちょっと難しかったが、新しい知識を学ぶことができた。」と、新たな分野に興味を持ち、困難を乗り越え克服した学習者もいた。このようなことから今後、文章を読む前の段階で学習者のレディネスに配慮して授業を進めていきたいと思う。

環境問題の「地球温暖化」は、日本語Ⅱ・Ⅲの総合や表現技術A（口頭表現）のクラスでも扱われており、読む前段階での学習者の背景知識は、他のトピックと比べ高かった。「日本語Ⅱで学んだことがあるので、日本語Ⅲでもう一回勉強する時は理解し易かった。」「このトピックについてももう勉強したことがあるが、また勉強しても問題がないと思う。」というコメントから他のクラスとの関連するトピックを扱うことも有用であると言える。

労働問題では「フリーター問題」を取り上げた。「自国とかなり状況が違うことがおもしろかった。」「フリーターの問題の現状と解決策がわかるようになった。」「フリーターというのは聞いたことがあったが、その背景ははじめて知った。以前はただ若者が自由に働きたいからだと思っていた。」と、読む前に学習者の「フリーター」についての知識にかなりのばらつきがあった。「フリーターと正規職員の関係を知った上で、現在日本の労働現状もわかった。」と不確実な知識を正しいデータ、情報をもとに修正する必要性も重要である。

4.2. 内容重視により思考を深めることを目指した授業

内容重視（content based）とは、「言語教育を言語以外の諸教育のカリキュラムと交流させることによって、言語の学習以外の学習（つまり内容に関わる学習）と言語学習との統合的学習を成立させることを目指すもの」であり、できたカリキュラムは、言語が背後に退き、どちらかと言えば言語以外の科目に近いものとなる（岡崎、1994）。つまり、内容重視では、まず「内容」を優先し、その内容を実現するための手段として言語が学ばれ、言語はその本質である、思考の手段・伝達の手段として位置づけられているのである。斎藤（1998）が述べているように、教科の内容を導入することで言語学習が「現実的で実質的な意味を持つ学習」となり、学習者の「知的興味や探究心を喚起し、学習に対する意欲

的姿勢」を引き出しやすく、「意味のある文脈の中で、目標言語によって提出される場合に最も言語習得は促進される」と考え、言葉の形ではなくその内容（情報）の理解・獲得に第一義的な焦点をおき、思考を深めることを目指し、授業を組み立てることにした。

授業で使用する教材は、『ニューアプローチ中上級日本語〔完成編〕』、『テーマ別上級で学ぶ日本語 改訂版』、『大学・大学院留学生の日本語①読解編』、『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』、『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級改訂版』、『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級用資料集 第4版』といった日本語のテキストを中心に、専門書からも本学部の3コースの専門につながるテーマを選択した。

次に授業で重視した点について述べる。

日本語Ⅱまでの授業とは異なり、この授業では、講義を聞くときに必要とされるスキルの養成を目指し、テキストにある用語の意味を推測させるため、極力板書を行わず、考えさせるようにした。その後、学生たちに説明させることで適切に理解しているかを確認し、必要な場合のみ板書して説明した。これは野田（2014：9）が指摘する「語句の意味を独自の方法で推測し、不適切な理解をする」日本語学習者の問題点を解決することを目的に行ったことである。また、語彙力を鍛えるためにできるだけ多くの関連用語を紹介し、意味の理解だけでなく、使い方に重点を置き、説明するよう心掛けた。

また、論文で筆者が主張していることを理解するためには、語彙の理解や短文の理解だけでなく、論の展開に注意することが重要になる。そこで、1つ1つの文の理解以上に、段落の役割、段落と段落の関係、全体の構成に注目させることを重視した。

授業で扱ったテーマについてであるが、授業で最も重視したのが、多くのテーマに触れさせ、考えさせることである。授業の目標は、共通教育科目と学科科目の履修に対応できる基礎知識を身につけさせることであったため、社会科学で話題となる様々な分野のテーマを扱った。

まず最初に扱ったのは、文化と社会に関するもので、言葉の役割をテーマとした。一般に言葉は情報を伝える手段と考えられているが、視点を変えて考えた場合、ものを認識する手段であり、言葉は私たちの認識のしかたを規定している。授業では、常識的な視点から物事を見るだけでなく、多角的な視点から見るとはどういうことかに気づかせ、それがどのようなことなのかを具体的な例を考えさせることで理解を促した。次に、現代社会にあふれるカタカナ語の使用について考えるテーマは、カタカナ言葉使用への批判だけではなく、その背景と原因に注目することで、カタカナ言葉の使用が、社会の変化と新しい価値観・考え方を表すことができるという利点を持つことを示している。このテーマでは、さらに和製カタカナ言葉ができる背景と原因に言及し、カタカナ言葉には現代社会が抱える問題の存在を見ることができると指摘していることから、授業では物事を社会学的視点

から見ることの重要性について考えさせることを重視した。

本学部には環境政策コースがあるため、日本語Ⅱから環境をテーマとして扱っている。日本語Ⅲでは、従来のリサイクルと循環型社会での基本理念、ごみゼロとゼロ・ウェイスト、循環型社会と持続可能社会といった概念を扱っている。授業ではリサイクルの利点とリサイクルを進めることにより起こる問題点を考えさせ、基礎的知識の獲得だけではなく、多角的視点から問題点を見つけ出す重要性に目を向けさせるよう心掛けた。

異文化のテーマでは、カルチャーショックの従来の捉え方と現在の捉え方から始まり、異文化適応への移行過程を話題とした。授業では、社会学や国際関係で扱われる専門用語に対応できるよう、同化、融合、共存、人種の垣塙、サラダボウル、モザイク、文化相対主義、自民族中心主義(エスノセントリズム)、リエントリーショック／逆カルチャーショックといった用語を導入し、学生たちの体験をもとに考えさせることで理解を促した。

さらに、社会学のテーマではジェンダーに関するものを扱った。ジェンダーは社会の問題を分析するための重要な視点となる。そこで、ジェンダーに関しては、2つのテーマを扱った。1つは、脳の使い方をテーマとしたもので、左右の脳の機能と使い方の違いの影響、脳の使い方と男女の役割の違い、男女の誤解の原因、補完関係としての男女の役割について考えさせた。もう1つは、社会現象を捉える基本的視点としてのジェンダーに注目したもので、どのように社会現象をジェンダーの視点から分析できるかを考えた。「男らしさ」「女らしさ」をジェンダーの視点で分析し、自分たちの経験からどのような事例があるかを考えさせ、その原因に目を向け、社会に隠れている問題点を考察するよう促した。

最後に扱ったのは人権に関するテーマである。使用した教材は冤罪の恐ろしさを指摘したもので、人が人を裁くことの恐ろしさ、裁判が人間の判断に基づいて行われる以上、間違いが生じないとは言い切れないという主張から、死刑制度の是非を考えさせた。

これらのテーマは、本学部の3つのコースで履修することを念頭に、講義等に対応するための用語と基礎知識の導入を第1目的としている。だが、授業を進めるにあたって、学生たちの知的興味や探究心を喚起し、学習に対する意欲的姿勢を引き出しやすくするために、具体的な事例に数多く触れ、自身に引き付けて考え、思考を深められるよう促すことを重視した。これは、野田(2014:9)が指摘する自分の既有知識をうまく使って論文に書かれている内容を適切に推測する方法を身に着けさせることを狙ったものである。

5. おわりに

本学部の留学生は、日本語Ⅲ履修時には総合政策基礎演習A・B・Cおよび文明論概論といった学科科目を同時に履修することになるため、日本語科目とはいえ語学学習に重点を置いたシラバスでは学科科目の履修に対応できる日本語力を身に着けるのは難しい。そ

のため、日本語Ⅰレベルからシラバス・デザインの際に学習スキルとコンテンツの配分に工夫を行っている。特に、日本語Ⅱと日本語Ⅲからは、アカデミック・スキルの養成とともに学部の3つのコースの基礎となるコンテンツの導入を重視したシラバス・デザインを行っている。

読解授業に関しては、日本語Ⅱまでは日本語Ⅰで学習した基礎的な文法知識を前提とし、文献購読に必要な表現や文構造の理解を重視し、そのうえでコンテンツを導入するシラバスとなっている。日本語Ⅲでは、2人の教員が担当する点を生かし、4コマのうち3コマで文構造の学習に重きを置きつつ、専門的な文章を理解するために必要な背景知識となるテーマを選び、内容把握を行う授業を実施し、1コマで内容の理解・知識の獲得に第一義的な焦点をおき、思考を深めることを目指した授業を実施した。授業開始当初は同じ読解の授業が異なる方法で実施されることに、学生たちが戸惑いを感じることもあるかもしれないが、同じ科目の授業であっても担当者が変わることで、異なる授業目標が設定されていることを理解させやすくなる。また、途中で数回実施されるテストでの確認事項もおのずと異なるものとなり、前者の授業では文法・語彙・表現の理解を確認する項目も入れたテストとなり、後者は内容理解を確認するためのテストとなるため、学生たちが行うテスト準備も異なるものとなる。

以上のように、「日本語Ⅲ（読解）」の科目では、「国際政策、公共政策、環境政策など学科科目を履修する際に必要とされる文献、資料を読むための知識と実践的な技術を修得すること」を目標としたシラバス・デザインを行い、2人の担当教員が役割分担することで、アカデミック・ジャパニーズの養成を目指した授業を行っている。

表1 学習者のトピックへの関心、内容の理解について

<p>(科学技術) 睡眠時間－短眠と長眠</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・内容は面白くてみんなの生活に役立つテーマである。 ・短眠と長眠の違いが理解できた。一番良い睡眠方法がわかった。 ・自分の睡眠習慣を考えられる時間だった。 ・勉強する前はこの話があまりわからなかったので、本当に役に立った。 ・これはすごくおもしろかったと思う。今でも内容を覚えている。 ・自分の健康に関する問題だから、いいと思う。 ・内容はおもしろかった。前わからないことがわかった。
<p>(環境問題) 地球温暖化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地球温暖化の定義、原因、影響、解決策が理解できた。 ・世界中でも厳しい問題を理解する必要がある。 ・日本語Ⅱで学んだことがあるので、日本語Ⅲでもう一回勉強する時は理解し易かった。 ・地球温暖化が深刻化している一方、様々な問題が出てきたことがわかる。 ・このトピックについても勉強したことがあるが、また勉強しても問題がないと思う。 ・総合と表現Aの授業に関連している。

<p>(文明) 文明はどのように伝わったか-1「茶」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・歴史を勉強するいいチャンスだと思う。 ・よび名で伝わったルートが違うことに気づくのがおもしろかった。 ・茶の呼び名の由来がわかるようになった。 ・今まで一度も考えたことがなかったテーマだったので、文明の伝播の仕方考える機会になった。 ・語彙がとても難しかったので、授業中には全くわからなかったが、何回も読んで内容がとてもおもしろいと思った。
<p>(経済) 衝動買いを誘導する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなの生活に役に立つと思う。 ・共感したのでおもしろかった。 ・衝動買いの定義が理解でき、衝動買いを誘導する商品と方法もわかった。 ・生活と密接な関係があるので、学んだ後、買い物する時よく思い出す。 ・これもおもしろかった。よく体験しているので、教室で勉強するチャンスがあって、よかった。 ・日常生活で気がつかなかったが、そんな学問があるとびっくりした。
<p>(化学工業) おいしい食感の理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・科学的分析をして、普段知らないことが勉強できた。 ・科学的な文だったので、ちょっと難しかったが、新しい知識を学ぶことができた。 ・ちょっと難しく、わかりにくいと思う。 ・語彙の意味は何となく分かるが、理解できなかった。 ・食べ物は味だけではなく、食感もたくさんあることがわかった。 ・科学的な文章だから、物理と化学の知識が必要である。
<p>(労働問題) フリーター問題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・将来就職について役に立つと思う。 ・自国とかなり状況が違うことがおもしろかった。 ・フリーターの問題の現状と解決策がわかるようになった。 ・フリーターというのは聞いたことがあったが、その背景ははじめて知った。以前はただ若者が自由に働きたいからだと思っていた。 ・一番難しいトピックと思った。 ・フリーターと正規職員の関係を知った上で、現在日本の労働現状もわかった。
<p>(価値観の変化) 若者の自己評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の国のことを知ることができるチャンスである。 ・日本人は思った通りだった。アメリカ人は思ったより高くて驚いた。 ・自分の自信について考えてみることができ、他国の若者の自信について共有して面白かった。 ・自分も自分の自信についてもっと考えられたので、本当によかった。 ・日本の若者が自信を持ってないことから、文化の影響が深いことがわかった。 ・国と国の若者の調査によって自信があるかについて大きな差があることがわかった。

(注)

- 1) 2017年度入学者からは、学科科目である「総合政策日本語Ⅰ」と「総合政策日本語Ⅱ」の単位取得が卒業要件となっている。
- 2) 山口(2012)で言及したが、留学生は出身国や文化が留学生同士でも大きく異なり、学校教育で扱われる項目も内容も異なり、日本人であれば一般的と思われる知識や情報に教育現場や社会の中で触れる機会がない事柄もあり、学生たちのレディネスは一樣ではない。また、日本社会・文化に関する一般的知識は、むしろ芸能、アニメや漫画といったポップカルチャー

やサブカルチャーに特化している場合もあり、特に現代日本社会の課題・問題に関するテーマに対してはレディネスがほとんどないと考えた。したがって、本学部の日本語プログラムでは、現代日本社会の課題・問題に関するテーマを日本語ⅠからⅢへと段階的にシラバスに組み込み、カリキュラムをデザインした。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）『改訂版大学・大学院留学生の日本語①読解編』アルク
- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著（2015）『改訂版大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』アルク
- 阿部裕子（2007）『テーマ別上級で学ぶ日本語 改訂版』研究社
- 安藤節子、他（2010）『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級 改訂版』スリーエーネットワーク
- 岡崎眸（1994）「内容重視の日本語教育—大学の場合—」『東京外国語大学論集』第49号 pp.227-244
- 八代京子、他（2002）『異文化トレーニング』三修社
- 鎌田修・ボイクマン聡子・富山佳子・山本真知子（2016）『生きた素材で学ぶ新・中級から上級への日本語』ジャパントイムズ
- 小柳昇（2002）『ニューアプローチ中上級日本語〔完成編〕』語文研究社
- 斎藤ひろみ（1998）「内容重視の日本語教育の試み—小学校中高学年の子供クラスにおける実践報告—」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号 pp.106-130
- 佐々木薫、他（2011）『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級用資料集 第4版』スリーエーネットワーク
- 野田尚志（2014）「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」『専門日本語教育研究』16号 pp.9-14
- 山口和代、他（2008）「総合政策学部における日本語プログラム（2008年度）」『南山大学国際教育センター紀要』9号 pp.86-101
- 山口和代（2012）「内容重視型言語教育による学部留学生へのアカデミック・ジャパニーズの指導—総合政策学部の日本語科目を例として—」『南山大学国際教育センター紀要』13号 pp.17-35
- 山口和代（2013）「アカデミック・ジャパニーズの養成を目指した授業実践—総合政策学部「日本語Ⅱ（総合）—」」『南山大学国際教育センター紀要』14号 pp.53-63
- 南山大学総合政策学部ホームページ <https://www.nanzan-u.ac.jp/Dept/pp/class.html>
<http://www.nanzan-u.ac.jp/Dept/fop.html>

Cultivating Japanese proficiency for academic subjects: Japanese III “Reading” in the Faculty of Policy Studies

Kazuyo YAMAGUCHI, Naoko YAMAMOTO

Abstract

The goals of the Faculty of Policy Studies at Nanzan University are for students to acquire academic knowledge and skills in specialized policy fields, by identifying and analyzing problems of our more diverse and complicated modern society from a multidirectional viewpoint.

One in ten students that this Faculty accepts are foreign students, mainly from Asia. Even those students with no Japanese language study background are admitted directly into a special freshman Japanese language program that prepares them to take regular academic subjects in Japanese just one and a half years later. Courses in this Japanese language program are defined as ‘general education’ courses and are divided into three ascending Japanese proficiency levels: I, II and III. In Japanese I, introductory classes in Japanese ‘grammar’, ‘reading and composition’ and ‘listening and speaking’ classes are offered, whereas in Japanese II and III, students take ‘reading’, ‘listening and speaking’, ‘writing’ and ‘presentation’ courses to develop their academic Japanese.

This paper reports on the Japanese III ‘reading’ course, which aims to develop academic knowledge and skills necessary to read academic papers and other literature relevant to policy studies.

KeyWords : academic subjects, general education subjects, reading class, academic Japanese, specialized field, content-based